

<全体分析>

試験時間 2科目で150分

解答形式

(第1問) 論述式 (第2問) 論述式・記述式 (第3問) 記述式・選択式

分量・難易(前年比較)分量 (減少・やや減少・変化なし・**やや増加**・増加)難易 (易化・やや易化・変化なし・**やや難化**・難化)

2024年度に続き、第1問が2年連続で2題構成となった。今後もこの形式が定着するのかもしれない。ただし、今年度のテーマは1997年度の第1問(15行)と近い内容であり、形式の違いはあるものの、本質的には東大が求めている能力は変わらないと考えられる。2024年度は問(1)が12行で問(2)が5行、2025年度は問(1)が12行で問(2)が8行となった。

第2問は、昨年度と同様に4行論述が1題、3行論述が2題、2行論述が2題。第2問の総行数の推移は2021年度が13行、2022年度が14行、2023年度が11行で、2024年度と2025年度は14行となる。

第3問は従来通り設問10問であった。6年連続で1行論述は出題されなかった。ただし、解答にあたって資料や地図、グラフの読み取りが求められており、例年よりも解答に時間を要するだろう。こうした資料や地図を読み取らせる形式は、2018年度以来である。

出題の特徴や昨年との変更点

第1問が2題で構成された点は、昨年度から続く新しい傾向だが、本質的には第1問・第2問・第3問ともに大きな相違はない。第1問は「20世紀前半における4つの大陸国家の変容」、第2問は「各時代・地域の外交」、第3問は「歴史のなかの都市」がテーマとなった。

新課程を踏まえた出題

第1問については、すでに新課程で求められるような能力を例年の東大入試において問うている。その点で、突出した変化があったわけではない。第2問の問(2)(b)は、歴史総合や世界史探究での学びが活かされるような出題であった。

その他トピックス

昨年度の第1問は、1960年代のアジア・アフリカにおける戦乱や対立を踏まえ、その歴史的背景を踏まえながら国際連合の取り組みを問う出題であり、今年度の第1問は、第一次世界大戦前後の時期にオーストリア＝ハンガリー帝国、オスマン帝国、ロシア帝国、清の4つの帝国がどのように再編されたかを問う出題であった。今年度から新課程となったが、巨視的に世界史を捉えて論じる理解力・構想力が求められていることは旧課程と変わらない。昨年度は現代史の知識の多寡で点数が左右されやすい問題であったが、今年度は昨年度よりも高い理解力・構想力が求められているだろう。また、出題されたテーマは1997年度の第1問と類似しており、東大対策における過去問の重要性を示している。

第2問は前年度と比べて難しくなった。問(2)(b)は世界史探究で求められている思考力を問う出題と言えるだろう。論点の暗記だけでは太刀打ちできない。

今年度のズバリ的中として、まず第1問の難型となった1997年度の東大第1問は、2024年度冬期講習「東大世界史」で扱われている。第2問の論述で出題されたキューバ危機については、2024年度直前講習「東大本番プレテスト」世界史第2問問3(b)で出題した。第3問の(4)(5)で扱われたはイェルサレム旧市街地区の地図については、それと同一の地図を2024年度直前講習「東大世界史テスト」第1講で扱っている。地図中の空欄の断定や、続く問題の解答に役立つことだろう。とりわけ今年度の問題は例年よりも解答に時間がかかったはずであり、こうして訓練済みの問題が多々出題されたことは、時間配分の面でも有利となっただろう。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
第1問	論述	20世紀前半における4つの大陸国家の変容(現代)	<p>問(1)2つの類型とは、革命が起こって帝政が崩壊したものの、多民族国家として領域をおおむね維持したロシア(→ソヴィエト政権)と清(→中華民国)であり、敗戦(と革命)によって帝政が崩壊しただけでなく、多民族国家が解体して多くの領域を失ったオーストリア＝ハンガリー帝国とオスマン帝国の対比と考える。前者に対しては(一部の国家は独立したものの)ソヴィエト政権がウクライナなどのソヴィエト政権を組み込んだソヴィエト連邦を成立させることで多民族国家を維持したことを示す。指定語句の「連邦制」はここで使うことが求められている。また、三民主義に基づき辛亥革命で成立した中華民国では、やがて(五族共和の理念のもとで)多民族国家の維持を図った。指定語句の「チベット」は、清の崩壊にともない独立を目指すチベットと、チベットを引き続き支配しようとする中華民国の立場を示す形で用いる。一方、第一次世界大戦で敗戦国となったオーストリア＝ハンガリー帝国とオスマン帝国では、多民族国家が解体することとなった。そのうちオーストリア＝ハンガリー帝国解体後に成立したオーストリア共和国は、ほぼドイツ人地域のみ限定され、オスマン帝国は領土の解体と民族的危機の高まりから、トルコ革命によってトルコ共和国を成立させたことを示す。そのうえで、(トルコ民族主義による)国民統合が進められたという形で指定語句を用いる。</p> <p>問(2)前の問題を踏まえて、解体したオーストリア＝ハンガリー帝国とオスマン帝国を考察する。「新たな原則」は民族自決であり、指定語句の「平和に関する布告」と「ウィルソン」は、ソヴィエト政権の平和に関する布告とウィルソンの十四カ条において民族自決の考えが示されている。オーストリア＝ハンガリー帝国では、民族自決が適用されてチェコスロヴァキアが成立するものの、(チェコ人とスロヴァキア人の対立、少数民族化したズデーテン地方のドイツ人問題など)引き続き民族をめぐる問題は続いた。オスマン帝国では、その旧版図のうち、トルコ共和国に含まれない地域は(国際連盟の管理下で)委任統治とされるが、アラブ人地域が分割されるなど、やはり民族問題は続いた。こうしたことを念頭に論を組み立てるとよい。</p>	やや難

第2問	論述 記述	各時代・地域の外交 (古代～中世・現代)	問(1)(a)当時東南アジアに広まっていた仏教は大乗仏教。資料の「菩薩」という語句もヒントになるだろう。(c)資料が東南アジア島嶼部のスマトラ島についての言及なので、まず義浄を想起するはず。ただし、「7世紀にこの大僧院で学んだ中国の仏教僧」には玄奘も当てはまるので、玄奘についても指摘できるだろう。問(2)(a)現代国家がイタリアを指すことは自明だが、その対外政策だけでなく「国際的な政治環境の変化」も問われていることに注意しよう。大きな潮流としてファシズム勢力の国際的な接近や、人民戦線の動きなども意識したい。(b)図1の説明から、ファシズム政権が古代ローマとイタリアの連続性を強調しようとしていることを読み取る。そうすると、図2がオクタウィアヌスの時期の版図なので、元首政における市民共同体の理念と、ファシスト政権が掲げる国民共同体の理念を結びつけようとしていること、図3がトラヤヌスの時期の版図なので、ファシスト政権の膨張主義的な姿勢を正当化しようとすることを踏まえて解答を作成したい。問(3)(a)「危機にいたるまでの経緯」が問われている。資料には兵器の言及があるものの、核については書かれていない。このことを踏まえて、核戦争の危機だったことにも触れるとよいだろう。	やや難
第3問	記述 選択	歴史のなかの都市 (古代～現代)	資料・地図・グラフを読み取らなくてはならないため例年よりも時間がかかったはず。解答は難しくはないが、全体の時間配分を上手にしないと大変だっただろう。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

第1問は、題意を踏まえていかに歴史的な文章を構成できるかが問われるので、論述力を日々研鑽することが大事となる。第2問は基本的な問題が中心だが、要点を的確に指摘できるように内容の理解を深めておかないと高得点は望めない。第3問は平易だが、第1問・第2問との時間配分にも留意しなければならない。基本知識をしっかりと習得したうえで、第1問の大論述だけでなく、第2問の短い論述に対しても十分な準備・対策が必要である。年度ごとに出题形式・字数など若干の違いはみられるが、本質的な学力を求められている点では変わらない。時間軸・空間軸に沿って大局的に歴史をとらえることを心がけよう。